

岡倉由三郎における オレンドルフ教授法の受容の考察

金 沢 朱 美

1. はじめに

オレンドルフ (Heinrich Gottfried Ollendorff, 1803 - 1865) が開発したオレンドルフ教授法は文法訳読教授法として、19世紀中葉に隆盛を極めた。日本にも明治期に井上勤 (1888) によって紹介されたほか、横浜居留地で生まれた「横浜ダイアレクト」と呼ばれるピジン日本語の学習書 (1874, 1879) の教授法¹としても採用された。旧韓末においてお雇い日本人教習として日本語教授を行った岡倉由三郎もオレンドルフ教授法を採用したとある。このように日本でも、横浜居留地の外国人の日本語学習者の間でも、また日本人教師によっても、オレンドルフ教授法は文法訳読教授法による一指導法としてその名がかなりひろく知られていたようである。

岡倉由三郎は、授業時間の増大よりも教授法の改善に努めたほうが効果がるかに大きいということ、自身はオレンドルフ教授法を採用して効果が非常に大きかったということを、後述の著書のなかで述べ、オレンドルフ教授法を推奨している。

稿者は別稿 (2006)²にてオレンドルフ教授法の詳細の考察ならびに岡倉由三郎の日本語教育におけるオレンドルフ教授法の採用の事実に言及、調査を試みた。

本稿では、岡倉由三郎におけるオレンドルフ教授法の受容について更に深く調査し、考察したい。

2. オレンドルフ教授法の概要

オレンドルフ教授法について、稿者は、井上勤 (1888) 翻訳・編纂によるオレンドルフ著の教科書“The Book of Learning English in Six Months” (『六ヶ月間英語卒業書』、以下、『卒業書』) の受容についての考察を通して詳細を述べた (2006)。ここでは、その結論から得られた概要だけを述べる。

オレンドルフの教科書の本文は全体的に短い会話を構成する文で成り立っており、繰り返し会話の基本文型が練習できるようになっている。疑問文と平叙文が交互に配列されており、問答法による練習が軸になっている。日常生活に密着した語彙が使われており、文法訳読教授法と呼ばれていても、オレンドルフが旧態依然の古典的文法訳読法で

はなく、学習者の会話の習得をもめざしていたことは明白である。自習できるよう単語の使い方や文法が詳述されているところは文法訳読法であるが、会話習得に比重をかけていたことが窺える。

核となるのは問答法である。質問形と答えの形がほぼ同じであるから、教師の質問に対して、学習者が簡単に解答を再生できるように配慮した点、言い換えると文の構造を強調している点は構造主義的なアプローチに近いものを感じさせる。

Howatt (1984) は内容的にはさほど意味のない膨大な量の問答練習を批判した³。一方、長沼 (1981) はオレンドルフ教授法を、直接法と昔の翻訳法の間で、たくさんの文法上の練習があり、日常の言葉をできるだけ反復し練習させることにより熟達をねらっていたとした。問答法と自由会話の違いを詳説して、オレンドルフ式の問答法を意味あるものとして評価している⁴。シラバスも会話重視のコミュニケーション中心になっていることを指摘している。

現在の文型積み上げ法⁵のようにすっきりした文型練習法にはもちろんなっていないが、最終的に会話をめざした教授法はその後のドリル出現に影響を与えたようである。当時としては斬新で、現在も盛んに使われている文型練習に連なっていく教授法をオレンドルフが不鮮明ながら考えていたことが窺われる。

なお、井上による翻訳には、江戸期の蘭学と同様に漢文訓読のための返り点方式が採用されている。井上が意味している「直訳」は漢文返り点方式を生かした逐語訳であり、原文の構造を理解するために施された逐語訳を完成文とせず、新たに日本語の統語法で訳を施した文を「意識」と呼んでいる。

『卒業書』は最後に3ページに亙る長文読解でおわっているが、その長文読解を除いた454ページに至っても初級上程度の練習が付されている。膨大な量の問答法による練習のなかに文型練習の萌芽や後のオーディオリンガル教授法における「過剰学習」の特徴が見られる。

3. 岡倉由三郎による日本語教育へのオレンドルフ教授法の取り込み

3.1. 「朝鮮国民教育新案」「教育時論」から見られる岡倉由三郎の諺文観ならびに目標言語としての日本語観

旧韓末における日本語教育は、外国語としての日本語教育が実施されている時期に当たっている。1891年5月、当時の漢城、現在のソウルに設立された官立日語学堂における日本語教育をもって、正式の日本語教育の始まりとされている⁶。

司訳院や倭館時代の日本語教育は別として、近代における日本語教育は上記日語学堂に最初に招聘された岡倉由三郎 (1868 - 1936) をもって嚆矢とする。

岡倉は日語学堂で、上述のオレンドルフ教授法を用いて日本語を教授したということが、後述の「朝鮮国民教育新案」のなかに述べられている。

本稿では、岡倉の言語観や言語教育観の考察を通して、オレンドルフ教授法がどのよ

うに岡倉の日本語教育に取り込まれ、どのように効果を上げたのか詳細を考察したい。

岡倉は東京大学に在学中、博言学と国文学を修めた。チェンバレン (Basil Hall Chamberlain) から博言学として日本語文法、琉球語、アイヌ語、朝鮮語等を学んでいるが、朝鮮語と日本語との構造上の類似ゆえに「朝鮮語に一層強い親しみを感じるようになった。」と述べている⁷。

卒業後、岡倉は朝鮮政府の日語学堂において明治 24 年 (1891) から明治 26 年 (1893) まで日本語教育に携わった。岡倉の朝鮮への招聘の経緯については稲葉 (1988) に考察がある⁸。

岡倉は 1894 年 8 月 22 日、東邦協会において東京府下の教育家を招いて朝鮮国民の教育新案に対する相談会が開催された際に講演した。その講演が筆記され、校閲補修を経て出版されたものが『東邦協会会報』第 2 号附録に掲載されている「朝鮮国民教育新案」(1894) (以下、「新案」) である。

「新案」のなかで、岡倉は「余は、去る明治 24 年より、朝鮮政府に聘せられて、日本語の教師と為り、同 26 年に至るまで、該国に在て、語学の教授に従事したりき。」(p.4) と述べている。開設すべきは中学校、実業専修学校、小学校であるとし、中学校での学課として外国語は日本語を推奨している。理由として、「一は日本語と朝鮮語と語派同一にして相学び易すきか為なり二は朝鮮に輸入する目下適當の知識は日本語中に含有せらるゝ最も多きか為めなり」(p.7) と論じている。更に「新案」のなかで、

…若し外国語を教ゆるとせば、必ず日本、支那、英吉利の三候補者現はるゝは今より疑ふべからず、(中略) 支那語は其根本たる語派よりして反対なり。之れを学ぶや困難にして、其益や少なし。英語は (中略) 京城に一英学校あり、創立以来茲に八年。其間卒業者僅に一人、而かも猶ほ片言交りにして完全ならず。(中略) 採用すべきは日本語のみ。(pp.11-12) (後略) (稿者註：下線部は原典では○印が付されている。)

として日本語を推すのである。

同時に岡倉は、漢字を廃すことを唱え、強力に諺文の優れている点を挙げる。

…従来漢学を勉めたるにも拘はらず、言語は全く自国語を以つて学ばしめ、同時に文字も漢字を廃し、而かも朝鮮語固有の仮名文字即ち諺文を用ひしめざるべからず。蓋し朝鮮の文章は凡て仮名文字を用ひしむべし。(中略) 人若し文字の可否を問ふものあらば、之を以つて世界第一の文字と為すに躊躇せず。一証を挙げんか、例へば「ミ、ム」の如き唇頭より発するもの又は「ク、グ」の如き咽喉より来るものゝ如き、凡て其形状に依りて作りたればなり。且此文字は頗ぶる綴字に妙にして、決して日本の仮名の如くに困難を感じず。随て明了を欠くの不都合もなし。彼らは既に斯かる佳良なる文字を有す。今の時に當り、朝鮮教育を改良せんと欲せば、断して従来の漢字を廃し朝鮮文字朝鮮言語を以て修学せしめざるべからず。(pp.10-11) (稿者註：下線部は原典では傍点が付されている。)

『教育時論』第 338 号 (1894、明治 27 年 9 月 5 日刊) にも諺文について、

…其組立略羅馬字に同じく、世界無比のアルハベットと云ふも不可なきが如く、誠

に完然なるものなり。然れども、其行はるゝ範囲は、極めて狭小にして、女子又は下賤のものゝ書簡等に用ゐるに過ぎず、受取証の如き迄、尚日本に於て正に受取申候也と、日本流の文章にて、一の日本字を交へず、全く漢字のみなると同じく、朝鮮流の文章にて支那人にも何の事やら分るまじけれども、兎に角漢字のみを用ゐるなり。(p.24)

とあり、諺文を絶賛するとともに日本と同様に仮名が漢字漢文より軽視されていたことを惜しんでいる。

岡倉の諺文観、目標言語としての日本語観、朝鮮語の学習歴を見るに、岡倉は日本語教授に対して外国語としての位置づけの認識が明確にあったこと、後述する「外国語教授新論」からも日本語を外国語として観察する確固とした視座をもっていたことが明白にわかる。その日本語の教授に際して、自身も造詣が深く、その合理性を賞賛している諺文を媒介として教えたことは間違いないと思われる。なお、岡倉は新式教育制を実施するための要件の一として外国語教育のみでなく、全ての教科実施においても「諺文を以て綴れる教科書を編纂すること」を挙げている。

3.2. 岡倉による旧韓末の教育観ならびに国情観

しかし、このように諺文の発明を絶賛している同じ論文のなかで、当時の朝鮮の教育や国情について、「…該国従来の教育は、唯孔孟の教を奉じ、忠孝の道を説くの一途あるのみ。他に教育あるを知らず。但し近年に至り、日本語支那語英語を順次創設しも、実効未だ現はれず。(中略)故に一言之を約して、朝鮮には教育なし、と謂ふも、尚過酷の評に非ずと信ず。」(「新案」、p.2)「…教育の一部に限らず、広く該国の全体より観るも、其の国情、其の国力、共に我国維新前後の比に非ず。之を我国に比すれば千年位は遙かに後れ居れり。(後略)」(「新案」、p.5)、「…同じ種を甲乙両地に蒔きても、甲乙両地必其収穫を同じくせざると同じく、日本には能く其種子を発達するに足るべき養素ありしに、朝鮮には之を欠きたり、否朝鮮には却って其種子の発達を妨害すべきものゝみ多かりし。」(『教育時論』第338号、p.23)等と明らかに罵詈ともいえる表現を伴った批判をしている。

岡倉のこれらの発言が当時や後世の日本人に与えた負の影響は非常に大きく、所詮、岡倉の教育者としての判断や感情も、時代の制約を大きく受けていることを見逃すわけにはいかない。他方で、言語学的には純粹に諺文の発明やその優越性を複数の雑誌において取り上げ、力説し、絶賛している一方、「新案」で日本語の仮名を批判しており(p.11、前掲)、また、「国語の採否は其国独立心の養成に關係す。故に就学に際しては、国家独立の一端として、是非とも彼ら自国語を以て学ばしめざるべからず。」(p.9) (稿者註：下線部は原典では○印が付されている。)と述べ、言語教育者としての岡倉の公平な面を示しているといえる。

本稿は、岡倉によるオレンドルフ教授法の採用の考察が主目的であるため、教育家としての岡倉による功罪の罪のほうにはあまり言及できないが、岡倉が、現在読んでも納

得できる優れた語学教授論を展開している陰で、当時の朝鮮に対する見下しの念をむしろ、帰国後に『教育時論』等に吐露していることはやはり見逃してはならない。

「新案」にはいかにも実直謹厳な教育者らしい発言が残っている。

…初め、余の学生に接するや、自ら一言一動を慎み、専ら感情上より彼等を感じせしめんと努めたり。(p.4)

という謙虚な姿勢で教えていたが、そうすると逆に学生たちが、

…反て余を以て彼等を崇敬するものゝ如く誤想するの傾向を生せしめたり。因て方針を改め。余は彼らに対して、一も忌憚する所なく、叱正励戒したりければ、彼等、始て余に順従せり。亦以て学生の一斑を觀るに足るべきか。(p.4)

とあり、二年の滞在のうちに徐々に当地の人々の、当時一般的であったと思われるさまざまな慣習を觀察しているうちに、その習性に対して軽視や見下しの念が生まれていったように思われる。

岡倉は特に勉学に支障を来たす四つの問題点を挙げている¹⁰。

一は、父母の喪に服したとき、三年の喪に服すといつて少なくとも二三か月は登校してこないために、学力がほとんど入学時の学力に戻り、退学者を生むことになる。

二は、雨天の日には十分の人は駕籠に乗るもので、駕籠に乗れない者が傘をかざして徒歩で外出することを恥とするため、欠席してしまうことになる。

三は、科挙が士人立身唯一の途と考えられていたために、科挙の当日は、他の語学学校は臨時休校を為さざるを得ないことである。多いときは科挙が一か月三四回以上もある。

四は、門地が職業を制限し、金力が官位を左右することである。岡倉の勤務校は官立ゆえ、学費が不要で給食の提供もしていたが、給食を喫するのが家計の一助として通学するくらいの内情であり、上述の慣習のために勉学心が起こらない者が多い。

若い岡倉は、これらの慣習に深い文化ショックを覚え、二年のうちにさまざまな感情が心内で形を成していき、帰国後の「新案」に繋がっていったものと思われる。それにしても「新案」や『教育時論』に書かれた論調や表現を、今日我々が読めばどのように読んでも蔑視の念を強く含んでいることは明白で許容されるものではない。

3.3. 岡倉由三郎の語学教授論とオレンドルフ教授法の採用

他方、言語教育者としての岡倉は、日本語教授の内容についてはオレンドルフ教授法を用いて、成果が非常に大きかったと「新案」に述べている。

…余の担任せる日本語学校に徴するに、三ヶ月目にして通弁を廢するを得たり。一年半にして日本新聞などを讀むもの数人を出せり。(日本の卑近なる俗語は未だ解せざるものも多かりき)三年にして通弁、差備官等数人を出すに至れり。(余はオレンドルフ¹¹の教授法を用ひたり)依りて朝鮮の爲めに計るに、外国語は日本語を以て最も利ありと爲す。殊に近来朝鮮人の学校談を聞くに輒近興廢したる学校の種類も多し。然も結果を得たるは電信学校と日本語学校の二校なりしと云ひ居れり。

(p.12) (稿者註：下線は稿者による。)

『教育時論』第 338 号には次のようにある。

…外国語は、覚へ易きこと、目下朝鮮人に必要なる知識を包含する二点に於て、余は日本語を主張す、(中略)此二長を備ふるものは、日本語なり。余の実験よりするも、朝鮮人は善く日本語を解し、大抵一年にして、普通の用を弁ずるに差支なきに至る。(p.24)

以上のことからわかることは、岡倉が日本語教授に際し、オレンドルフ教授法を用いたこと、成果が非常に上がったこと、外国語科目の学習者にとっての母語を媒介とした授業をなしたこと、即ち諺文の活用をなしたこと、朝鮮語を深く理解していたこと等である。

同じく『教育時論』第 340 号 (1894 年、明治 27 年 9 月 25 日刊) には、「岡倉由三郎氏の語学教授論」として次の記事が掲載されている。

…中学校師範学校等の卒業生が、数年間を刻苦して、英語を修め、尚且つ多くは未だ十分に其用法に通ぜず、又明瞭に英文の書を理解すること能はざるは、彼我語派の差異甚しくして、才力の平凡なる者には、之を識破すること易からざるに依ると雖、亦其教授法の宜しきを得ざるに出づるもの多し。(中略)又文法は、読書会話と共に之を授くべしとの説の如きはアリストートル以来、近世の教育大家が、皆之を論ずる所なれども、其實行せられざるは、全く教師其人を得る能はざるに依るのみ。いやしくも教師其人を得ば、死法を守りて、文法を教ふる如き弊害は、之を去ること難からず。(p.13)

とあり、語学教授の最も肝要なところは教授法と教授法を生かすことができる教師であると力説している。要点は、文法は読書会話と共に教えるべきであること、教授法を心得た教師がいないため、なかなか実行されないこと、教授法を熟知した教師がいれば実際に適用できない文法だけを切り離して教えるような弊害はなくなるであろうとの考えを強く表明している。

次に、『教育時論』第 338 号から 340 号にかけて、附録として連載された『外国語教授新論・附国語漢文の教授要項』(1894) (以下、「新論」) を考察することにより、岡倉の語学教授論の仔細をみていきたい。

岡倉は「新論」解題において、我国では外国語教育としては現在、英語教育が最も広く実施されており、さまざまな外国語教授法のなかでも最も進歩していると思われる英語教授法にも多くの問題があること、そのために授業時間を増やすよりも教授法の工夫をした方がはるかに効果大きいこと、また、英語教育 (外国語教育) は国語教育を基として相互に連携して実施されなければならないが、現在は、全く連携なく行われているばかりか、国語教育にも問題が多々あること、国語教育というのは単に雅文を教えることだと考えている教員が多いこと、しかし、国語のなかには口語も含まれており、口語の使用法を規則正しく教えて運用できるようにしてやることこそが小学校課程における国語教育であること、国語における漢字の使用については訓読みは漢字を使用しない

ようにすること、漢文教育においては、漢文は外国の文であることを忘れていた教員が多く、教材も難易を考えず、ただ単に古典から取材していること、外国語教育としての教材と児童のための自国語教育の教材とは異なるべきものであるのに、その認識をもっておらず、母語教育のための児童用教材を外国人学習者のために使用している教師が多いこと、教材の導入順序としては易から難へ、近きより遠きへの認識のない教師が多いこと等を挙げている。

以上、岡倉の「新論」から語学教授論の解題をみてきた。このように要点を取り出してみると、それは外国語教授論のみならず、国語を含む言語全般に亘る教育論であり、言語教育全般に亘る理論である。しかもその言わんとする要点が、賛否はともかくとして、現在の言語教育や日本語教育の視座からみても一々正鵠を得ており、その斬新さや合理性、科学性に驚くのである。

「新論」は、明治時代における文体と旧字体で記述されているが、文体と表記を現代のものに置き換え、内容を味読すれば、「新論」はあたかも現代において著述された論文であるかのような、圧倒的な今日的な説得力を伴って現代人にも訴えかけてくる。

岡倉は、上記解題においても以下にみる詳細な論述においても、授業時間を増やすよりも教授法の工夫や改善に努力したほうが効果はるかに大きいと述べ、教授法の改善の必要性を繰り返し訴えているが、その岡倉が採用したオレンドルフ教授法は、岡倉にとって最も効果的な教授法であったに相違ないことが窺われる。

上述した概要の内容について、岡倉は、「一、教授法の改正 二、教師の矯正 三、教科書の改正」の3点にまとめている。(p.8) そのなかに岡倉がどのようにオレンドルフ教授法を取り入れているのか、以下、「新論」をみていきたい。

外国語学習者のなかに、甲乙二種の学生があり、甲は学校で「普通学」の一科目として外国語を学ぶ者である。乙は外国語専修者であるが、乙のなかにも二種あり、個人教授の場合とクラスで複数の学習者が共に学ぶ場合がある。個人教授の場合は、「オレンドルフ」や「グアン」法のような形式を採り、十分日本語の特質を考慮し、工夫をして教えれば「必ず良結果を生ずるに至る」。(p.14)

乙種の、クラスで複数学習者が共に学ぶための教授法については、甲種の普通学級の学習者と大差なく、その上、事情が複雑なために概説は困難であるとして、甲種の学生について詳細を述べている。

甲種の初学者についていえば、外国語の教授は尋常中学第一年級から始めるべきであるとする。教授内容は、一、綴字法 二、習字 三、読方 四、書取 五、訳解 六、文法 七、作文 八、会話 九、翻訳の九種の科目がある。

岡倉がオレンドルフ教授法に影響を受け、日語学堂における日本語教授に際して、自身でも実践したであろうと思われるのは上記一～九の項目のうち、特に次の点である。一、綴字法について 例えば英語は綴字法が「紊れに紊れたる」が、それゆえ、単語を多く例示して、その発音と綴字法のなかに規則を見出し、生徒に教えるべきであるとする。オレンドルフによる教科書（『卒業書』）では、聴解練習が困難であった時代に、発

音について実に多くの例語とともに詳細に規則を示して、学習者の理解と練習を促しているが、岡倉も多くの例示をして綴字法の教授法を説明している。一例を挙げると、mile を示して、e で終わり、子音一つを隔てて、i があるときはこれをイと発音せず、アイと発音するのが常であるとして、mile, tile, side, tide, like の例を示している方法は、オレンドルフ『卒業書』と同様の教授法である。(稿者注：二重下線は原典に拠る。)

三. 読方について 一文字毎の発音と一語としての発音と一文としての読方に分け、綴字法との関連を論じている。一文字毎の発音を教えるには、目標言語になく母語にある音、母語になく目標言語にある音、また、似ているが異なる音等を図解で丁寧てに示し、舌唇の位置を示すなど効果が大きいとして、オレンドルフの発音解説法のように合理的である。一の綴字法とも関連することである。読方には「聞き取」を同時に奨励している。

五. 訳解について 解題に記したが、岡倉は、以下のように述べて訳解には口語を用いることを推奨している。

…解釈の為用ゐることばは差支のなからん限り成るべく卑近にし通俗を專一とすべし説明上必要あるに非る以上は耳遠き漢語又は雅言を用ゐる生徒をして訳語の理解に遅々たらしむるが如き事断然あるべからざるなり

オレンドルフ著の『卒業書』を翻訳、編纂した井上は漢文訓読式の「直訳」を採用したが、岡倉は直訳に対して五頁を割いて理由を詳述し、強く反対している。

…假令へば He went to Yokohama. を「彼は横浜にまで行きし」と訳するが如く「あの人と」云ふ方悟り易きを「彼」とし「へ」と云ふべきをにまでとし「行きました」を「行きし」とするが如き其一例なり (中略)

「彼の人は横浜へ行きました」と云ふべきを「彼は横浜にまで行きし」と訳するが如きを世間称して直訳と云ふ直訳の利なくして害多き事は上の例にても知らるべけれどなほ其不条理なる事を示さん為に左に其訳例を掲ぐべし

一. He is as tall as I. 彼は私だけそれだけ丈高くある

二. I thought to have seen him before. 私は前に彼を見たべく考へし (後略)

(pp.28-29) (稿者注：一重下線部は原典では○印が付されている。二重下線部は原典のまま。)

と述べ、生徒に訳語の意味するところを理解し難くし、丸暗記させる傾向を生む、習慣になると直訳をしなければ読解を困難にしてしまう、生徒に一語一語返り読みする習慣をつけさせてしまうために、朗読や説話を聞き取る力を失くさせる等の弊害が生ずるとしている。しかし、井上の意味する漢文訓読式「直訳」と、岡倉の意味する語義と文法に忠実な「直訳」は、上にみたように解釈のずれが見られるようである。

六. 文法について 説話や作文等に他の教材から得た材料に基づいてその中から規則を見出し、応用するべきものであり、文法だけを重んじすぎると実際の運用を誤ることがあると、例を挙げて説いている。文法を教えるに当たり、常に教師自身の母語あるいは生徒の母語を比較の基礎とすることが肝要であると述べている。「文法」という独立した科目を廃し、「会話」の時間において一方で会話の教材を与えると共にそのなかに提出さ

れる法則を教えて会話と共に練習させる方法である。

こうすれば、文法の難しさを感じずにその効果を享受できる。知らず知らずのうちに無味乾燥な規則を学ばせることができるのである。

これは正しく、オレンドルフ教授法の方法である。文構造に対する確固とした知識をめざし、文法訳読教授法として知られていながらも、教え方としては会話教授のなかに文法項目をそれとなく導入し、会話の練習をさせて文法を機能的に理解させ、運用の修得をめざすのは、正しくオレンドルフ教授法の間答法であり、文型提出方法である。

文法と文法の運用の修得をいかにさせるかの点において、岡倉は最もオレンドルフ教授法の影響を受けたのではないと思われる。岡倉自身も、「彼のオレンドルフの外国語教授式の如きを本邦語の性質に由り大に斟酌を加へて実行するに於ては仮令へば食餌に混ざるに薬を以てするに其苦きを知らずして其効を享くるが如く知らず識らず無味の規則を学ばしむの益あり」(p.34)と述べている。岡倉は実験によって、会話と文法を融合させる指導法の利点を十分に感じたと言っているが、23歳から25歳まで日語学堂にあり、1894年当時26歳であったから、実験というのは漢城の日語学堂での日本語教授の経験を指していると考えられる。

八. 会話について 従来の「時候の挨拶」「旅中問答」等の、(稿者註:今日、situational syllabus と呼ばれる)教授法も中級以上の生徒には悪くはないが、初学者にはオレンドルフ教授法のように、「ことばの組織上似寄りたる語句文章の使用に慣れしめ生徒をして其学びたる一定のことばづかひに拠り之になづらへて自らこれと同類のことばづかひを為す事を得せしむる様努むべき」(p.36)である。

岡倉がいかにオレンドルフ教授法に影響を受けたかは、以下の文が全く同様の内容をほとんど同様の表現で解説していることから顕著に窺われる。

…千百萬ノ変化アル談話ヲ僅々四百余ページノ小冊子ニ収ムル事元ヨリ難キハ当然ナリサレド一步ヲ退キ考フレバ千種萬様ノ会話文一句一音ノ異ナルヲ盡ク暗記セザレバ談話スル能ハズト云ヘバ到底億兆ニ及ブモノソ詮ナルベシ談話ノ種類ハ多シトイヘ其秘訣ニ至レバ即チ一ナリ若シ学ブモノ秘訣ヲ悟レバ千語万語最も容易ナリト云フベシ・・・『卒業書』(p.453)

…事物毎に用ゐることばづかひ固より無限なるべしと雖も類を以つて之を分けんにはその数意外に少きを見るかゝる類の重なるを挙げ例を授けて之に比喻せしめんか生徒は自己の理解力を用ゐることはを運用し得べきなり其暗記を事とする教授法に勝れる勿論と云ふべし・・・『新論』(p.36)

初学者における文の練習は、構造上の類似を基にしてなされるべきである、即ち、文型としての文の定着練習をする、これは暗記力を基とする教授法より優れている、無味乾燥な文法を学ばなくても自然に実力がつくと言っている。

ここには前述したようにオレンドルフ教授法にその萌芽が見られる文型を確立しようとする考え方が見られる。岡倉の、特に文法や会話の教授法のうちに、明らかにオレンドルフ教授法からの顕著な影響が観察される。

文法の項目と会話の項目は、オレンドルフや岡倉によれば有機的な連関をもつものであるから、問答法によるこのような練習は条件反射的な解答を引き出すことをねらいとしているゆえに、やはり後のオーディオリンガル法に通じるものがあるのである。

九. 翻訳について 訳解の項目においても述べたが、岡倉は、「生徒をして直訳風の弊を避けしめ常に本邦流の思想の示し方を基礎とし之に由り原意の在る所を論し原文の語句に拘泥する事なく且つ類を以て事を断ずるの力を養はしむるを宗とすべきなり」(p.37)と論じている。

翻訳について岡倉は二通りの翻訳法があることを別のところで説いている¹²。一つは原文を巧みに解釈して咀嚼し、翻訳の跡が全然残らないように純外国語に移す方法、もう一つは原文をそのままに外国語に移す方法である。

岡倉は一度ラファディオ・ハーンに頼まれて『小栗判官物語』を訳したことがあるが、前者の翻訳法で訳したところ、ハーンから「これは純粋の英文で日本趣味が存していない、東洋風の趣が存していたらもっと良かったのに。」と言われたことがあると述べている。それで勅語を英訳するにも註解的でなく、聖書がヘブライ語から英訳されたように、原文の mystic な点、oriental な点を存するのが良いと思うと述べている。要は、直訳風は避けなければならないが、原文の味わいを損なわないように、自己流で「意訳」することを慎まなければいけないと説いている。「自分一流の解釈をなして万事外国風に訳さんとするのは常今のハイカラ風であると思ふ。・・・我天皇陛下の勅語を英訳して英国の勅語のようにするのはよくないと思ふ。」と岡倉は述べている。

以上、岡倉の外国語教授法を考察してきたが、岡倉の論述は外国語教授法のみならず、母語を含めた言語教育全般に及んでいる。「新論」には、オレンドルフ教授法のほかにも「グアン法」等、岡倉が推奨する他の教授法の名前も挙げられているのだが、オレンドルフの名前が最もよく挙げられ、岡倉が最もオレンドルフ教授法を信頼、評価し、深い影響を受けて自身でも工夫しつつ、実践してきたかがよくわかる論文である。

今日から見れば、オレンドルフ教授法に対してはさまざまな批判がなされている。Howatt (1984) は、歴大な問答法の練習に使われている例文に対して変った質問である、練習の意味が判然としない、目的が不明瞭である等の批判をしている¹³。しかし、オレンドルフ教授法より後に生まれ、非常に科学的であるとされたオーディオリンガル法も頂点の時代を過ぎれば、ドリルが無意味、器械的過ぎる、不自然な会話である等と批判を浴びた。いかなる優れた教授法もやがてはより新しい教授法に取って代わられる。

オレンドルフ教授法は明治の時代において、学習者の言語を知悉し、翻訳や文法と会話に含まれた四技能の総合力の促進のために教授法を研究し、工夫していた学者であり、かつ実践者であった岡倉には、斬新な教授法であったと結論できる。また、旧韓末における、まだ外国語としての日本語教育期に、母語を奪う直接法ではなく、オレンドルフの文法訳読教授法が尊重されたのは象徴的でもあるといえる。

4. おわりに

岡倉由三郎の言語教授法は、自身でも述べているようにオレンドルフ教授法を継承したものである。特に、文法教育と会話教育の融合をめざした点で、オレンドルフ教授法に大きく影響を受けている。音韻の理論的支柱をもち、語彙を分類化する方法も同じである。岡倉は、会話教育の中での生きた文法の修得をねらいとしている教授法をめざしていた。「新論」を見れば、オレンドルフ教授法が岡倉に与えた影響は明瞭であり、岡倉の言う「言語教育上の実験」も漢城における日本語教授を指しているに相違ないのだが、今一つ明確にし得ないのが、オレンドルフ教授法の取り込みの詳細なる実践記録の有無である。

『教育時論』340号（1894、明治27年9月25日刊）には、「時論が三回の附録に分載せる岡倉氏の論文は、能く従来教授法の欠典を挙げて、且其正路を示したりと云ふべし。（中略）又此論文に於て、岡倉氏が朝鮮人に日本語を教授したる方法を、詳細に聞くを得ざりしは、甚遺憾なり。願くは氏再び之を世に公にせられんことを。」(p.13) と結んでおり、岡倉が日語学堂における体験を具体的には語っていないことが知れる。

齋藤一（1999）は、「岡倉由三郎の英文学」において岡倉の翻案のしかたや「琉球の読者に」¹⁴の書簡を通して垣間見える偽善者的言動を批判している。そのなかで、岡倉は英文学会でただ一人朝鮮をよく識る学者であるにもかかわらず、1919年¹⁵に齋藤勇が朝鮮の人々に同情した英詩を発表したのに対して、岡倉は沈黙を守り通したことが批判されている¹⁶。1919年は、漢城で日本語を教授したときからずっと後のことになるが、岡倉には1916年、「琉球の読者に」を書いた頃には、自分も含めて当時の日本人を後ろめたく思う感情も生じたのではないか。岡倉は後になってあえて漢城時代を詳らかに記した資料を残さなかったのかもしれない。資料の存在の有無の確認や周辺の事情の考察を他日に期したい。

註：

- 1 幕末から明治期にかけて横浜居留地において生まれた日本語を基とするピジン語が「横浜ダイアレクト」と呼ばれた。1874年、Hoffman Atkinson, 1879年、Bishop of Homocoなる人物によって、“Exercises in the Yokohama Dialect”という学習書の再版、改訂増補版が作成された。初版は、日本国内では存在が確認されておらず、未見である。再版、改定増補版の序文に、Ollendorfシステムを用いたとある。しかし、Ollendorfの綴りはfが一つ欠落しているが偶然か。
- 2 金沢朱美「オレンドルフ教授法の受容の考察—井上勤ならびに岡倉由三郎の受容を中心に—」『目白大学人文学研究』第3号、目白大学、2006年
- 3 A.P.R. Howatt “A History of English Language Teaching” Oxford University Press, 1984 p.143
- 4 長沼直兄「日本語教授法講義」昭和30年（1955）、軽井沢にて集中講義、『長沼直兄と日本語教育』所収 開拓社 昭和56年（1981）pp.95-97, p.131
- 5 例えば、海外技術者研修協会編集『にほんごのきそ』シリーズ、『にほんごのきそ』は昭和47年（1972）海外技術者研修調査会から初版発行
- 6 任榮哲「韓国人から見た日本語」大阪樟蔭女子大学にて講演、1997年

- 7 岡倉由三郎「恩師チャムブレん先生を偲ぶ」『英語青年』第73巻2号、1935年
- 8 稲葉継雄「旧韓末「日語学校」の日本人教師—その代表的事例—」『お雇い日本人教習の研究—アジアの教育近代化と日本人—』国立教育研究所紀要第115集、昭和63年（1988）
- 9 『教育時論』は明治18年（1885）4月5日、開発社から初号発刊、毎月3回5の日に発刊された。
- 10 岡倉由三郎「朝鮮国民教育新案」『東邦協会会報』第2号 pp4-5 1894年
- 11 岡倉は「朝鮮国民教育新案」の中でも、「外国語教授新論」の中でも「オルレンドルフ」と表記している。
- 12 「岡倉教授の翻訳意見」『英語青年』16巻7号 明治40年（1907） p.173
- 13 前掲書 A.P.R. Howatt p.143
- 14 岡倉由三郎「琉球の読者に」『英語青年』36巻2号 大正5年（1916） p.62
- 15 1919年は三一独立運動が起こった年である。
- 16 齋藤一「岡倉由三郎の英文学」筑波大学にて口頭発表、1999年

（かなざわ あけみ 目白大学）